

ほろ酔いインタビュー●佐佐木幸綱交遊録●

2024.4.8 於・佐佐木

〈第23回〉一九九一年(平成3年)〈

楠本壺石氏と応援歌を歌う、湾岸戦争と短歌、「短歌の現在」①明るさと暗さ、②素人の時代、

③新しい家族詠、谷岡亜紀「佐佐木幸綱論」をめぐって

佐佐木幸綱＋黒岩剛仁・加古陽・奥田亡羊・久松洋一・高山邦男・森部信次・佐佐木頼綱
＋佐佐木朋子

記録作成Ⅱ森部信次

▽楠本憲吉氏と応援歌を歌う

(庭のビニールプールではしゃぐ鈴歌子
ちゃんと華綱君、プールの水がリビング
の天井に反射して煌めいている)

高山 本日はお日柄も良く風薫る快晴の一
日となりました(一同、大笑)。ゴールデ
ンウィーク二日目は佐佐木幸綱先生宅での
収録です。

黒岩 結婚式みたいだね。

幸綱 前回(二三年五月)、君らが氷頭を

やたら珍重したから今日も用意したよ。

黒岩 鮭の頭の軟骨を酔じめにした一品で
すね。

久松 美味しいです。

加古 あの後、『瀧の時間』を読み返した
ら、(雪雲のような氷頭で飲む酒は雪の
来る前 雪の降る夜)(言葉よ)という氷
頭の歌がありました。

一同 へえー。

朋子 今日、幸綱さん手づくりの真鯛の
昆布じめもありますよ。

森部 これも美味しいですね。先生のつく
られたしめ鯖もうまかった。

幸綱 今でも、昆布じめ、しめ鯖はちゃん
とつくるんだ。

朋子 それでは、酔っ払う前に写真を撮り
ましょう(笑)。

高山 今回のメンバーは、いつもの黒岩剛
仁さん、加古陽さん、奥田亡羊さん、私高
山邦男、佐佐木頼綱さんに加え、森部信次
さん、「心の花」誌上で話題の「佐佐木幸
綱先生語録」を連載中の久松洋一さんに来

ていただきました。佐佐木朋子さんには随時参加していただきます。テープ起こしは森部信次さんが担当してくれます。今回は大口玲子さん谷岡亜紀さんが作成された年表に従って進めていきたいと思えます。おおよそ九一年の話からスタートとなります。それでは、恒例ですが、初めて来てくださった久松さんのお話から。



久松 いつも誌上で楽しく拝見させていただいています。今日は楽しみにしてまいりました。どうぞよろしくお願いします。

(テオが、久松さんの脇に座る)

高山 久松さん、気を付けて。テオさんは寄り添うふりをしてお皿の料理にロックオンしているから(笑)。テオさんは頭がいから新人を狙っています。

幸綱 久松君が「心の花」に入会したのは東京歌会を上野文化会館でやっていた頃だね。

久松 七八年の一月です。

奥田 久松さんが短歌を始められたのは、祖父である久松潜一先生の影響もあつたんですか。久松家は佐佐木家とも親戚です。久松 祖父が亡くなったのは高三の時ですが、その頃は短歌に興味はなかつたですね。幸綱先生とは私の父親が従弟の関係になります。

幸綱 俺は正月に窪田空穂先生と章一郎先生に挨拶に行き、久松潜一先生の練馬のお宅に伺った。東大の偉い先生がずいぶん来ていたけど、偉い順じゃなくて来た順に座るのがすごいと思つたね。

加古 久松さんの短歌の入口はどこから始まつたんですか。

久松 最初は近所で開催された祖父の追悼句会で、俳句に興味を持ちました。大学の

俳句研究会の先輩に楠本憲吉先生がおられたので、先生のもとで俳句を始めました。短歌は浜田康敬さんの歌が面白い、と思つたのがきっかけです。由幾先生にお電話でご挨拶して「心の花」に入会させていただきました。

黒岩 僕が中野サンプラザでの歌会に参加したのが八〇年後半ですが、久松さんはサラリーマンの先輩という感じで親しくお付き合いさせていただきました。初期の有名な歌に「死」という語がいとまたやすく使われて生保会社の研修終わる(『ビジネス・ダイアリー』)がありますが、職場の歌がすごく話題になつた方です。

高山 当時は職場の歌をつくる人は少なかったよね。久松さんはそのはしりというか、サラリーマンの歌ということでは黒岩も影響を受けたんじゃないかな。

黒岩 そうですね。

幸綱 俳句は今もやっているんだろ。

久松 四国に単身赴任時に鷹羽狩行先生の「狩」に入り、それが終刊になって今は片山由美子先生の「香雨」にいます。

黒岩 「抒情文芸」にも投稿されておられますよね。

高山 久松さんの短歌には俳句の季語がよく使われていますね。

黒岩 久松さんは八五年に明治記念館で結



婚式を挙げられて、僕も列席しました。式の終わりに楠本先生をはじめ慶應出身の方が壇上にあがって応援歌を歌ったのですが、早稲田出身の幸綱先生も輪の中に入れて大きな声で歌っておられた（笑）。

久松 幸綱先生が歌うことになったのは、楠本先生をエスコートするために席に行かれて、そのまま一緒に壇上に上がられたからです。それはもう幸綱先生のご配慮だったのです。

幸綱 今はワイドショーのコメンテーターとして、旬を過ぎた役者や芸人などが出ているけど、あの頃は慶應の池田弥三郎さん

とか楠本さん、早稲田でいえば暉峻康隆先生といった名物教授が出演していた。テレビ局には彼らの教え子もいっぱいいたしね。そういう形でテレビは始まった。タレント教授たちは馬鹿さ加減もちゃんと計算していたね。

久松 楠本先生は依頼を断らなかつたので、テレビ局では「困ったら楠本さんに頼め」、そんな話もあったそうです。

黒岩 楠本さんはCMにも出ていたしね。

高山 「佐佐木信綱研究会」には、弟の宏二さんが参加されていて、大変お世話になっていきます。洋一さん宏二さんの兄弟関係はどんな感じなのでしょうか。

奥田 洋一さんの幸綱先生語録のまとめ方と宏二さんの信綱研究のまとめ方がよく似ていて、データの処理の仕方がそっくりです。

久松 幸綱先生語録は弟に見てもらって助かっているんですよ。

高山 宏二さんは『佐新書簡』を丁寧に研究されている。奥田さんがおっしゃったようにデータの処理が丁寧ですごいです。

奥田 幸綱先生語録のメモの細かさもすごいですね。僕は九九年の入会ですが、久松さんは二次会の赤ひょうたんでも幸綱先生の傍でいつもメモされていて、それを見てびっくりしたのを覚えています。

黒岩 兄弟連携の賜なんです。連載はあと一年続きますね。

奥田 最初、一五〇〇号記念号に十五ページほど割り当てたら大丈夫かなと思っていたら五十ページ分ぐらいいったんです。

高山 ただ、先生はあそこまで細かくメモをされて、こっぱずかしいみたいな感じはなかつたんですか。

幸綱 もう三十年も昔の話だからさ（笑）。

▽湾岸戦争と短歌

高山 湾岸戦争と短歌、これは加古さんから提案された項目なので、まず加古さんからお願います。

加古 九〇年八月に始まる湾岸戦争に限らず、世界が非常に大きく動いた時期で、多くの歌人が時事を詠みました。『瀧の時間』の後記にも「いま振り返ってみれば、いわば歴史の展開点ともいうべき時期であった」という時代認識が書かれています。そんな時代に先生はどういう作歌の態度でおられたのかお伺いしたいと思っています。

幸綱 中東はちよつと遠いんだよね、感覚として。九〇年四月に早稲田大学教員組合の委員長になったから教員組合の仲間といろいろの話はしたと思うけど。委員長を終えて翌々年にオランダへ一年間出かけるわけです。そんな時期でしたから、そのこと



に絞って深く議論したり記事を一生懸命読んだりした記憶はないですね。

加古 『瀧の時間』の「歴史Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」にポツポツと時事を詠んだ歌が入っています。へ耳なれぬワンガン指して男を積む船団テレビ画面に湧くも」とか、「於万座温泉」でも〈湯上りの浴衣にて見るテレビにて素早く向きを変え行く戦車〉とか。これはソ連のクーデターの歌ですが、ゴルバチョフがもう死んでいるかもしれないという。だからお忙しい中であっても、時事に対する関心はあつて所々で詠まれているなど。

幸綱 新聞とかテレビの情報ぐらいいですね。
加古 情報がない中でどう詠むかっていうときに、何か抑制的ですね。関わっていない人が詠む時の一つのスタイルがそこにあるのかなって思つたんです。

幸綱 湾岸戦争はオランダでもあまり問題になっていなかった。ヨーロッパ統合で、パスポートがなくても隣の国に自由に行けるようになったり、輸出入などいろんなことで国家間の壁が取れた、そのことに関心が集まっていた感じだった。オランダから車で検問なしに国境を超えてフランスやドイツのスーパーに行つて自由に買い物ができる。これがヨーロッパかと思つたけどさ。後で考えるとそうなたばかりの時期にオランダに行つたんだよね。岡野弘彦さんの歌が歌壇で話題になったのは、〇三年のイラク戦争だったかな。

奥田 『バグダッド燃ゆ』ですね。

加古 最近タモリが「新しき戦前」と言つて話題になりました。

幸綱 それは、タモリじゃなしに、前から言っているけどね。

加古 『瀧の時間』を読み返していたら、へ戦前はいまかしからば戦後いつ幼き声が階のぼり来る（「秋風秋雨」）と、まさに「新しい戦前」を先生は詠んでおられる。

幸綱 僕だけじゃなくて、かなり多くの人が

が言っているといますよ。

加古 そういう時代の空気つていうか、日本も戦争に巻き込まれて、今が新しい戦前なんだつていう空気があったのかなと思つたんですけど。

幸綱 九〇年のドイツ統一が劇的だったからね。僕がヨーロッパに行つた一年半か二年前にベルリンの壁が取り払われたと思います。

奥田 湾岸戦争のときは、黒木三千代さんの『クウエート』という歌集が話題になりました。〈侵略はレイブに似つつ八月の渦谷越えてきし砂にまみる〉とか、かなり踏み込んだところで歌つたのですが、逆に戦争を性犯罪と同一視したことが批判されたりしました。一方で先生は戦争を自分の日常と一緒に歌われていますね。加古さんがあげた万座温泉の連作でも、湯上がりの浴衣姿でテレビの戦車を見えています。戦争であっても日常の中から歌うことに気をつけられていらつしやうたんでしょうか。

幸綱 今だつてそうだよ、ウクライナ、イスラエルの問題をどう歌うか、難しいよね。我々は茶の間にてテレビで見ているだけだからさ。そういう立場にいながら歌うのは無責任だつていふべきなのか、やっぱり関心を持つのは大事なんだというべきかという問題だね。

黒岩 東日本大震災のときにも話題になりましたよね、当事者しか詠めないものなのか自分が体験してなくても時代の出来事として詠むべきなのかっていうね。

幸綱 短歌は一人称の詩だからなかなか難しい。俳句とか現代詩なら別なだけけど。

奥田 あと湾岸戦争のときに、先生は自衛隊派遣の歌を継続的に詠まれてらっしゃいました。『瀧の時間』にへんごしに戦争の影 海外派兵反対の投稿歌百首を越えて」という歌があります。

久松 湾岸戦争ですけれども、朝日歌壇のデータを見たら九一年二月十日は四十首中三十九首が戦争の歌でした。新聞歌壇でも朝日だからこそと思うんですが。

幸綱 近藤芳美さんが積極的に戦争の歌を採っていた頃だね。戦争の歌の投稿数が多かったんだよ。もちろん、いい歌悪い歌で選ぶけれども戦争の歌が百首あると一首か二首でもとにかく採らないといけない、という気持ちになるよ。ものすごく数があっていたと思う。馬場あき子さんも積極的に採っていた。

黒岩 幸綱先生よくおっしゃっていますよね、歌誌の選をするのじゃなく新聞歌壇だから、新聞記事の一部にならなきゃいけないって。

久松 投稿者としては数多く出せば選者の

先生が選んでくれるわけだから、いい歌が集まりますよね。

高山 話がそれてしまいかもしれませんが、戦争と文学ということでは、先生にとってはベトナム戦争の方が身近に感じられていたのでは。安保など学生運動とも結びついてくるわけだし。

幸綱 六五年に「ベトナムに平和を！市民連合（ベ平連）」を鶴見俊輔さんらとつくった小田実さんと親しかったから、わりと身近に感じていたけど。東洋の問題にアメリカが踏み込んだわけだからね。

黒岩 ベトナム戦争は日本にある米軍基地から軍用機が飛んでいって爆弾を落としたわけだから当事者でもあるという感じはあるよね。

幸綱 小田さんとの近しい関係があつて、河出の「文藝」にいたときは逃亡兵の手記を掲載したの。逃亡兵をどこに移したのか、何人匿つたのかつて、公安警察に調べられたこともあつた。

ベトナム戦争は日本人と近かつた気がする。文学がどうのつていうんじゃないって一般の感覚としてね。ベトナム戦争以降の世界紛争はわれわれ一般人には距離があつたんじゃないか。

加古 ベトナム戦争の時代は、戦争を経験した日本人が戦争の記憶をまだ持っていた

時代でもありましたね。

森部 ところで、ベ平連のメンバーだった野坂昭如さんと戦争の話もされたんですか。

幸綱 野坂さんと田中小実昌さんとは新宿二丁目あたりの怪しげな店によく飲みに行ったけど、野坂さんと政治の話はしたことはないと思うね。すぐ興奮して喧嘩になったりする人だったよな。

黒岩 「朝まで生テレビ」でも大島渚監督と大喧嘩していたね。

奥田 あまり関係ありませんが、野坂さん、歌上手いですよね。



高山 マリリン・モンロー・ノーリタインとかバーズブルースとか。野坂さんという人は動物は歯を磨かないんだから人間だつて磨かないでいいと言つて、歯を磨かなかつたと聞きました。だからすごく臭くなかつたですか。
幸綱 野坂さんとキスすることもなかつたからな(笑)。



奥田 ベトナム戦争と比較すると、湾岸戦争では情報統制が徹底されたから、ミサイルで戦車や施設をピンポイント攻撃する映像しかテレビで流れない。戦争が人間の死を感じさせないTVゲームのように見えた。反戦運動が高まりを見たベトナム戦争のときはまったく違う状況だったんですね。
▽「短歌の現在」① 明るさと暗さ

高山 次は「短歌の現在」についてです。最近まで連載していましたが、この頃は時評ですね。今読んでも新鮮です。
幸綱 ここに「短歌の現在」が「秀歌選」になる前のコピーが全部ある、二十四年分になる。

奥田 僕にとつては「短歌の現在」は幸綱先生が考えていることをキャッチする窓口でした。新しい家族の歌とか、ふるさとの歌、植物の歌とかですね、歌の第三句について、なども勉強になりました。

高山 いろいろあると思いますが、今回はとりあえず九一年に絞つて話してください。
奥田 僕はそのときまだ心の花に入会して

いなかつたので、すみません。とくに印象に残っている話になってしまふんですが、例えば「短歌の事典13冊」(二〇〇〇年七月号)というのをよく覚えています。これだけ手元に置けばいいという事典が列挙され

ていて、短歌を始めた頃に無理をして揃えました。それが後になってとても役に立ちました。「短歌の現在」は短歌の根本的な指針になるし、具体的なアドバイスもくださるのすごく楽しみに読んでいたんです。
加古 けっこう印象的なテーマがありますね。このレジュメに挙げてある「明るさと暗さ」(九一年九月号)は、若い作者に暗さへの理解を求める内容でした。先生はどういう意図を持って書かれたのでしょうか。
幸綱 当時、ネクラとネアカという言葉があつて、ネクラつてレットルを貼られたらもう駄目なんだよね。そういう時代に対して言いたいことがあつた気がします。

高山 黒岩とか俺なんかは、まさしくそういう感じですね。先生がここで書いているのは、無理をしてネアカを演じなくていいんじゃないかということですね。
奥田 ライトヴァースの後でも、先生は暗いものを評価されていた。僕が最初に新人賞をとつたとき、先生は「君のは暗いな」とおっしゃりつつ、それを否定されませんでした。

高山 ぼくは暗い人間だったから、先生にそういつただけで嬉しかった。自分の存在価値というか、暗くてもいいんだなつていう自信がさ。

奥田 八〇年代がああいう浮ついた時代

だったから、本質的なことを先生は書かれ
たんですよ。

加古 バブルの時代に「暗い」っていうのは、本当に人を貶す言葉でしたよね。

高山 政治の話をしちゃいけない、宗教の話はダメ、もつと言えば文学も。誰もが話せる話題じゃなければネクラと言われちゃう。

黒岩 ネクラっていうのはただ暗いんじゃないんだよね。暗いっていうのは病気になるってか、家族が亡くなったとかある時期の気分のことだが、ネクラはもう性格として生まれつきお前は暗いんだと烙印を押しされちゃうところがあつたからね。

幸綱 八〇年代から九〇年代にかけてネアカじゃないと駄目だっという風潮があつた。考えてみると、俵万智が出てきたのはネアカだからなんだよね。歌集がね、やっぱりネアカの時代の空気だっと思うね、『サラダ記念日』は本当に全体がネアカなんだよ。

加古 バブル時代の空気を掴んだということですね。

黒岩 確かに俵さんって絶対人の悪口を言わないし、今で言うとか大谷翔平に通じる何かがある。大谷は敵地に来てプーイングを浴びても「それだけ注目されているってことですから、自分も敵チームのファンだったからプーイングしたと思います」みたいな

ことを言つて常に前向きにとらえる。俵さんもそういうところがある。

高山 明るさでつてこと言えば、先生の歌は明るい歌だと思っんですよ、基本的には。絶対に暗い歌ではない。

奥田 それは文学の命題としての明るさでもありますね。短歌が敗北の抒情であつていいのかもしれない。

加古 『瀧の時間』を読んで改めた思つたのは、暗さを見つめた歌がけっこう多いことです。例えば〈暗き時代を恋うごとく学生にしゃべりゆく暗さゆえ輝くくさざあるを〉(『歴史Ⅲ』)。〈明るすぎる時代の目には見えにくい原子の雲の芯の火の色〉(『歴史Ⅰ』)とか、〈暗くしんどく言葉の川をさかのぼる歌は万葉のむかしも暗し〉(『歴史Ⅰ』)という歌があつて、暗さをかなり見つけている。

幸綱 時代の明るさにかなり反発していたんだらうね。

高山 奥田さんが言われるようにネクラ、ネアカという時代の問題と文学としての明るさ、暗さを分けて考える必要があるかもしれないですね。

幸綱 多分、このころ暗さと明るさがあるんなところで問題になったんじゃないかと思う。具体的に言うとネクラ・ネアカといった言葉が今じゃ考えられないぐらい流行つ

たよね。だから暗さと明るさの問題を、いろんな場面で考えたということですね。

黒岩 先生自身が書かれていますよね、近代短歌もそうだったと。病氣だったり貧乏だったり、マイナスイメージを詠み込むことによつて読者を得ていたわけだけど、短歌って落ち込んでしまつたら駄目なんじゃないの、自殺した人もやつぱり負けたつてことなんだ、自分はそれを評価できないつておっしゃつたけどね。

幸綱 「結核文学」っていう言葉があつた。結核文学は基本的に暗いわけだ。十代、二十代の若い人が早死にするんだからね。そういう文学とは違うんだ我々は、というのが戦後文学の大きなテーマだった。それがベースにあると思う。

▽「短歌の現在」② 素人の時代

高山 「素人の時代」(九一年十一月号、十二月号)についてぜひ触れてほしいんですけど。

奥田 よく素人の時代になつたつていうけれども、幸綱先生の視点は、近代を含めて全部素人の時代なんじゃないかっていう指摘にびっくりしました。

高山 すごいです。歌壇史に対する「素人の時代」という切り口は鮮やかで、目が開かれる思いです。

幸綱 今も続いてんじゃないか。

高山 素人は破壊する力があるから素晴らしい、今は逆に素人が権威の側になっちゃってると。

黒岩 SNSとかそうだよ。素人がお互いに共感の輪を広げていこうとしているんだけど、これでは深まらない。

高山 三十年前にそう書いた先生は、今の状況はどう思われているのでしょうか。

奥田 今、SNSで暗い歌なんか出しても誰も「いいね」を押さないですからね。軽くてちよつとアイデアがある歌が「いいね」ってなる、それは本当に文学なのか。

幸綱 素人の時代がまだ続いてるんだね。映画俳優なんかも素人っぽい人ばかりでさ、昔の俳優とは演技に対する考え方などちよつと違ってきているよね。

黒岩 映画を中心に出演する場を選んでいたら高倉健さんなんかと比べると、今の俳優はちよつと有名になったから映画にも出ます、ドラマにも出ますねとかって、許されないとと思うんだな。

奥田 殺陣とかも修練を積んだ俳優とそうでない人ではまったく違うそうですよ。幸綱 俺は映画人だからテレビには出ないとかさ、少し前まではそういう人がいたよな。

加古 先生自身が「素人の短歌を作って歌

壇に出た」と書かれています。

幸綱 最初、歌壇からそういう迎えられ方をしたわけですよ。それでそういう意識はずつと持っていた気がしますね。

高山 そのときの権威はアララギですね。和歌革新運動も旧派の権威を破壊することであり、素人のパワーっていうのを先生はすごく認められていた。先生が「素人として」と言う意味は、アララギの権威を破壊するというスタンスですよ。

幸綱 佐佐木信綱は青少年時代の俺のことを、ものすごく心配してさ、俺の歌が全然わからないといつて前川佐美雄さんに相談したらしい。前川さんが大丈夫です大丈夫ですって(笑)。

僕らの時代から素人の時代が一般化したというかね。たぶん口語の問題もあったと思う。何を感じるか何を表現するかよりも、技術習得が表現の自立にとって大事なんだというアララギに対する反発があったわけですよ。「アララギ流が玄人なら俺は素人だ」という論法で歌壇に素人として出たわけだ。

高山 ぼくの「佐佐木幸綱先生語録」を語ると、先生は「ただ上手いだけの歌はだめだ。どこかに素人っぽさがあることが必要だ」と言われたことがあります。先生は忘れられているかもしれませんが、ぼくの

作歌にとつて大切なテーマになっています。

ただ、先生の現在地は、玄人中の玄人だと思っんですけど(笑)。

黒岩 芸術院会員は素人じゃない(笑)。
奥田 かたや修辭がもてはやされた時代があったじゃないですか。それに對して先生は、そうじゃない、モチーフなんだっていうことを打ち出した。

加古 大事なのは何を歌うか、ということですよ。一方で「素人の時代」の結論が「短歌はいま、滅亡に向かつて急ぎつつあるようだ」とあります。それは今どうですか。

幸綱 それはちよつとわからないけどね。穂村弘君が古典はわからないからって一切拒否していますね。穂村説に賛同して、古典と切れるのが正しいんだっていう流れが出てきていると思うけれども、万葉集とか古今集とかと繋がってなくて短歌なんだというのは無理で、そうすると狂歌でも何でもいけど別の物を立てないといけない。記紀万葉以来の歴史と繋がっているのが短歌なんだからね。アフォリズムとかSNSと違うのは古典と繋がっているからであってね。日本人のある種の精神史と重なっている部分があるから、そこを無視しちゃうと短歌の存立意義というか、なんで短歌なんだということが分からなくなる。

黒岩 上田三四二の「底荷」の論もそうだ

けど、全部取っ払っちゃったら何か宙に浮いた感じになっちゃうよね。

高山 そうだよ。先生にいつも叱られてたというか言われてたことは、ちゃんと勉強しなきゃ駄目だということだね。今の若い人は勉強してない人が多いと思う。俵さんや穂村さん以降しか読んだことない人とか、昔の歌を全然読んだことのない人ってけっこういる気がするんです。関心がない人と言ってもいいのかもしれないが。

奥田 先生の「人食いの遺産」(『佐佐木幸綱の世界』12古典編2) についてすごい評論だと思うんです。古典が歌人を食うという見方です。でも食われて初めて一人前みたいなところがあります。先人の作品を読めばそれが乗り移ってきます。それを全く切り捨ててしまったら短歌は成立しない。

高山 今の若い人は横に繋がっているだけで縦の繋がりが全くないっていう感じがあるのすごくします。

幸綱 X(旧ツイッター)と同じだよ。Xの人気者になるのはそれはそれでいいと思うけど。

黒岩 何十年先のフォルダーに残るということは意識してないからね、今一瞬でいいんだよ。僕なんか学生時代に幸綱先生と出会って「心の花」に入った頃の短歌を作る喜びは何かというと、先生がおっしゃっ

た「短歌を作ることによって千三百年前の人と会話ができて、もしかすると千三百年後の人とも短歌という形式で繋がることによつて、会話ができるかもしれないじゃないか」っていうダイナミズムをすごいと思ったことだね。

高山 たとえば、「心の花」の企画でも、「心の花」の先輩歌人たちを大事にして度々特集しているのは、先生のそういうお考えが反映していると思う。

黒岩 歴史を感じることによって自分の歌も磨かれていくっていうかさ、今この場さえよければいいっていうのと違うよね。



奥田 人麻呂のように「靡けこの山」って現代人である自分も言えるかどうか。
久松 「素人の時代」の最後に、「素人は：ほどなく、つまらなくなつてやめてしまおう」とあります。素人でも持続することによつて何か展開があると思うので、続けることが大事なキーワードに見えてきました。

幸綱 続くっていうのは最低百年ですね。世代でいうと大体四代程度だよ、今の現代短歌も百年続くかどうかだね。短歌の千三百年の歴史を大したことではないっていう感覚でいられるかどうか、日本語だって万葉集の時代から千三百年確実に続いているわけだからね。

黒岩 戦後に日本語をローマ字化しようという危うい時期もあったけれど。

幸綱 土岐善磨は本気になってローマ字化を考えたいだね。あの人は歴史だとか伝統だとかっていうのはほとんどん転換して構わないという独特の考えを持っていたね。
久松 今このとき先生は今が第三の素人の時代だと言われています。第一の時代が和歌革新運動期で代表選手が啄木であり、第二が敗戦とそれにつづく、いわゆる第二芸術論時代。そして、第三の時代のチャンピオンは言うまでもなく俵万智さんである。啄木にしても俵さんにしても、もちろん先

生にしても、現在では誰も素人とは思わな
いわけですね。だから出るときは素人だ
けど、短歌史の中でその人が仕事を果たせ
ば、時代を代表する歌人になっているん
ですね。

幸綱 その辺が難しい。昭和三十年代が口
語短歌の始まりの時期になると思う。僕
同世代の平井弘君が早い。誰がというこ
とじゃなくて、昭和三十年代に現在広まっ
ている口語短歌史の源流がスタートし、今も
それが続いている。その流れの中の一人に
佐佐木幸綱がいるという形だよ。それが
どこまで続くのか、やっぱり口語は駄目
だったとなるのか、それとも口語と文語の
混じりみたいなものになるのか。今、文語
混じりが新鮮だという空気があると思う。
そういう多様な展開をはらみつつ、昭和
三十年代にスタートした口語短歌の歴史が
どう続くのか、この先はどうなるのか、ま
だ分からない時代がつづいている、と思っ
ています。新聞歌壇だって文語が多少混
じっているものが主流だものね。完全な口
語短歌ももちろんあるけれど。

俳句史も同じような道をたどっているみ
たいですね。ただ俳句は切れ字が大事だか
ら、独特の文語表現があるので、短歌より
もっと文語的な空気が残っている気がしま
す。

黒岩 口語だけだとどうしても弛んだ感じ、
あるいは締まらない感じになりがちですね。

幸綱 詩の言葉として日常語とどう切れる
か、そこで文語ついでなのは我々の時代ま
ではかなり大きな役割を果たしてきた。
だから穂村君たちの現代短歌は、文語を外
して現代日本語が、どうどこで詩の言葉に
なつてゆくか、日常語と切れるのかって
いうことが難しいんだよ。

加古 おとし『キマイラ文語』という本
が出て話題になりましたが、文語と口語を
交えたキメラ型の文体が増えてきていま
す。俵さんもそんな感じですよ。

奥田 川本千栄さんのご著書ですね。現代
は馬場あき子さんもそうですし、歌壇の大
多数の人は文語と口語の混合型です。それ
に対して完全口語がどれくらい一般化する
のかというところでしょうか。

高山 先生のお話の中の、いかに日常を切
るか日常を切らないと詩にならないとい
うお話、その辺のお考えをもう少し教えて
いただきたいのですが。

幸綱 詩の言葉とXの言葉は違うはずなん
だ。詩の言葉は日常の言葉とどう切れる
か、もつとと言うとどう次元を変えていくか
という問題だと思うんだよ。一番簡単な
のは文語だ。でも文語だけじゃなくて、も
う少し日常語と違う日本語のあり方がある

はずで、そういう言葉を我々はまだ発見し
てないんだと思う。

高山 なるほど。先生のお話で課題が見え
てきました。そこ一番悩み深い所ですね。
幸綱 これから先の話だよ。どうなって
いくのかっていうのは。

奥田 文語に戻れ、じゃなくて、先に進めつ
てことですね。

幸綱 内容だけじゃなくてやっぱり言葉の
問題があるんだよ。きつと。何を歌うか
はもちろん大事だけど、それだけじゃな
くて表現の現場が重要だということ。

高山 久松さんが早速ガシガシとメモを
とっておられる。



奥田 新しい幸綱先生語録が今生まれ、今記録されつつある。
一同 おっーおっー!

▽「短歌の現在」③ 新しい家族詠

高山 「新しい家族詠」(九一年二月号)についてはいかがですか。『金色の獅子』にも関連しますし、これは触れた方がいいと思うんですけど。

幸綱 これからの家族詠は難しいよね。僕が結婚した頃というか、八〇年代から九〇年代と、三十年以上たつた今では、結婚率や離婚率が全然違う。男女が社会的な約束とか型みたいな中で安心してやっていった時代は終わったらしい。たとえば結婚・離婚は、昔は大きな出来事だったけど、今はどうでもいいやという次元になってきたみたいだ。これは、ほんの一例だけれど、短歌の問題というより社会全体の意識が変わってきたわけだ。家族詠なんていうのも当然、変わってゆくだろうね。

高山 この文章の中では、家族というのはもはや個の問題になってきているとご指摘されているわけですよ。

幸綱 そう言うよりしょうがないよね。社会の問題だとか制度の問題だったんだよ、昔は。今は個人の問題になってきて、男に生まれてきたけど女として生きるのもいい

よねって言うような。

黒岩 近頃は、アンケートでも「男」「女」「その他」答えたくない」の四項目があります。

奥田 最近の「NHKのど自慢」なんかでも、客席の家族を映すのが減ってきているように思います。「会場にご家族の方が応援に来ています」みたいな家族礼讃がなくなってきました。家族のいない人もいるじゃないかという気遣いでしょうか。

幸綱 個人が大事だつて言えばそれまでだけれど、不本意ながら結婚して幸せになった人もいっぱいいたわけだね、特に子供を作るとなると年齢も関係があるから、あまり早かつたり遅くなつたりするとうまくいかないこともできます。歴史的にこれぐらいで結婚すればいいんじゃないのつていうのが何となくあつて、それがいろいろんな形で制度化されて、我々の時代に繋がつていたんだよね。

▽谷岡亜紀「佐佐木幸綱論」をめぐつて

高山 「心の花」で九一年一月より谷岡亜紀「佐佐木幸綱論」の連載がスタートしました。これは先生から口火を切つていただいたと思います。

幸綱 佐佐木幸綱論はすごく少ない。馬場あき子論とか高野公彦論に比べると全然ない。



い。谷岡君だけが書いてくれている。谷岡には非常に感謝しています。書いてくれないと批判もないし、後の時代にどうなっていくかわからないからね。

高山 現実的には、先生を前にして失礼になつたらとか、情けないことになつてしまつたらどうしようかという恐れはあると思うんですけど。じくなくなつた方なら別ですが。幸綱 長生きした人だつて生きているうちにいっぱい書かれているよ。

久松 『牧水賞の歌人たち 佐佐木幸綱』では奥田さんも書かれていますよね。

奥田 あれでは全然足りてないです。それに先生に助けをいただいて作つてくるから、やはりここにいる人たちが必ず書かなきゃいけないんだと思います。

幸綱 今度、「歌壇」に谷岡君が連載したものが本になるらしいね。

奥田 僕は必ず書きます。今はそれしか言

えません。今日は未来を語らなければいけないから。

高山 分かりました。僕も覚悟を決めて必ず書きます。

加古 谷岡さんが佐佐木幸綱論を書いたのは、谷岡さんの意志で始めたんですか。

高山 その事に関しては、谷岡から直接聞いたエピソードがあります。菱川善夫さんと佐佐木先生と谷岡が飲んでた。そのときに谷岡が佐佐木幸綱論を書きたいと先生にお願したところ、菱川さんが偉そうなことを言うのなら佐佐木さんの歌を百首言えるのかと言われたそうです。実はその前から何かの機会にアピールしようと思っ

て必死に先生の歌を覚えていたらしいのです。それで、来たあーチャンスと思っ

てペラペラと止めどなく暗唱したというんだよね(笑)。で、菱川さんが感服して、もう

わかったというところで連載が決まったという事なんです。なんか谷岡得意の大盛っ

ぱい話なんだけど。

幸綱 谷岡君は昔、自分の息子に誰かの歌を言ってみろって、何十首も覚えさせたら

しい。

黒岩 確かに谷岡はね、自慢するだけじゃなく実践しているのはすごいなと思う。小

紋さんが生きているときに、俵さん、大口さん、駒田さんの仙台キャンディーズを小

紋さんと谷岡と私で訪ねたことがあるんだけれど、松島を巡る遊覧船に乗っているときに短歌のしりとりをやるようになった。誰かが歌を言い、次の人は終わった音から始まる歌を言うわけです。そのとき谷岡はすごい勢いで歌が出てくるんだよね。

幸綱 みんな歌を暗記していたね、旅行に行くのとバスの後ろの席で短歌のしりとりをしていた。

黒岩 私も幸綱先生の歌は出てくるんだけど、「黒岩さんは幸綱先生の歌しか覚えてない」と言われて、恥ずかしい思いをしました。

高山 それは小紋潤さんの影響ではないでしょうか。小紋さんは歌が上手くなるには

歌を覚える、とにかく覚えなきや駄目だと指導していました。僕もそう言われて一生懸命覚えました。たぶん、谷岡もそう言

われていたのだと思います。

幸綱 俵も大口も小紋君が先生だよ。

黒岩 駒田さんも指導を受けたんですよ。歌集をまとめるときもお世話になってい

る。幸綱先生もよくおっしゃっていましたよ。赤ひょうたんで新入に好きな歌人を

聞いて、好きって言うなら百首くらい覚えてなきや駄目だよ。

高山 覚えると血肉になる。百人一首だっ

てみんな一応覚えたよね。

幸綱 今はあんまり言わないよね、暗記するとか。仙台キャンディーズの話も八〇年代、九〇年代だろう。その頃はみんな覚えることを訓練したんだね。

久松 朝日新聞の二一年三月十八日付の「語る人生の贈りもの」という幸綱先生のインタビュー記事を持ってきたんですけど、これから始める人に声をかけるとした

らと聞かれ、「昭和時代の先輩歌人の短歌を読むことではどうね。好きな短歌は暗記する」といと思います。短歌は俳句とともに

に伝統詩ですから、自分だけで勝手に作ってもだめなんです。：「型」を習得するには

滑走期間が必要です。500首作ると、仕組みが分かる。1千首作ると、言いたい

ことが言えるようになる。理屈で覚えても、うまくいかない」と答えておられます。

高山 まだまだ話は尽きませんが、久松さんの素晴らしいまとめが出たところで前半

はここまでとします。

